

博士論文（要約）

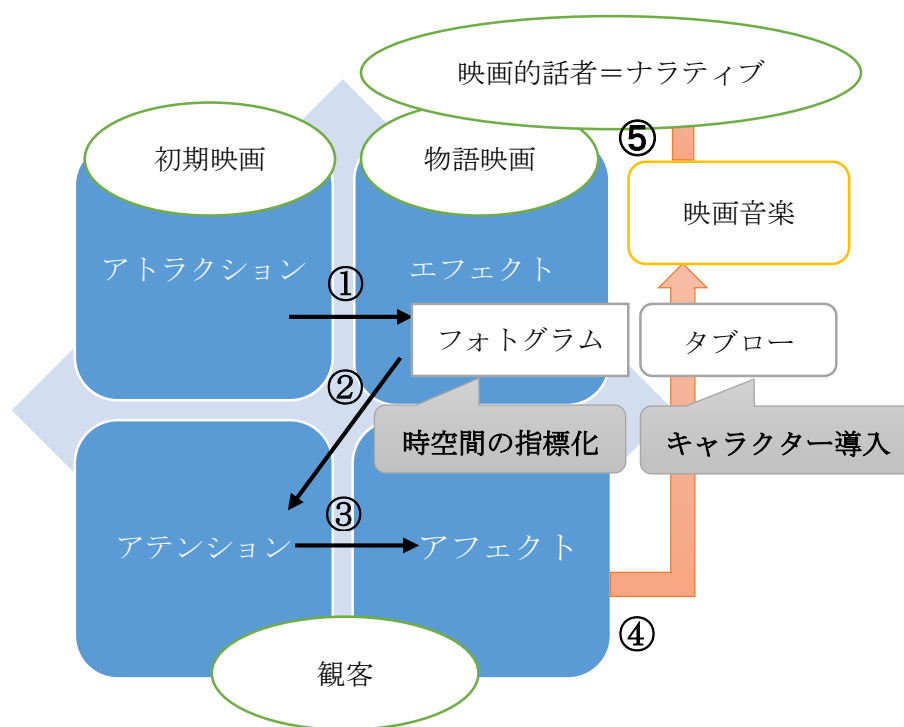
映像・情動・身体  
—情動的観客とハリウッドの物語映画—

難波阿丹

## 1. 問題意識と背景

本論文は、D.W.グリフィス監督作『国民の創生 (The Birth of a Nation, 1915)』を題材とし、アメリカの「institutional film (制度的映画)」形成期に組織された観客の身体的知覚のマネジメントの問題系を考察した。1910 年前後に、映画の「narrative (ナラティブ、物語)」と映画館の規律化が達成され、物語映画の制度的な視聴体制が整えられた。本時期の映画制度は、観客のナラティブへの没入と、キャラクターへの同一化を強いる鑑賞体制を備えると共に、その身体を「矯正」＝「ディシプリン」化する管理・制御システムでもあった。このシステムが、現代的なメディア環境における観客 (ユーザー) の身体の組織的な管理・制御機構の原型をなしているのではないかという仮説が本論文の議論の出発点である。

『国民の創生』を到達点とする 1910 年代の物語映画は、初期映画の「attraction (アトラクション)」を「effect (エフェクト)」として映画のナラティブに抑圧し、観客の流動する「attention (アテンション)」と「affect (アフェクト＝情動)」を、映画の「filmic narrator (映画的話者)＝ナラティブ」によって「矯正」し「ディシプリン」化する機能をも備えていた。この概念の作動を、理論図式に書き出すと下記の図になる。



①初期映画の「アトラクション」は、制度・組織化されていく物語映画のナラティブにショット単位の「エフェクト」として抑圧される。「エフェクト」化したスチールイメージは、時空間およびキャラクターの指標となる。それらの指標は②観客の「アテンション」を方向付け、③「アフェクト＝情動」を喚起する機能を担う。そして、④観客の「アテンション」の散逸や「アフェクト＝情動」の微細な流動を「映画的話者＝ナラティブ」が回収し「矯正」＝「ディ

シプリン」化する。そのうえで、⑤シークエンスやショット間に叙述上の関連性を与える映画音楽が「映画的話者＝ナラティブ」の機能を補助する。

本論文では、初期映画研究において繰り返し論じられてきた「アトラクション」、「エフェクト」、「アテンション」の作動と、文化理論において近年活発に議論がなされている「アフェクト＝情動」を手掛かりとしながら、『国民の創生』を題材に、映画のナラティブと映画館のインフラストラクチャを制度・組織化することによって、観客の身体を管理・制御した物語映画メディアウムの性質を論じた。

## 2. 各章の構成

本論文は、五章構成である。

第一章では、「アトラクション」、「エフェクト」、「アテンション」、「アフェクト＝情動」、を扱う理論的な枠組みを検討した。初期映画研究者トム・ガニングが提出した「Cinema of Attractions (アトラクションの映画、注意喚起の映画)」の「アトラクション」概念は、エイゼンシュテインが定義する、観客にショックを与え、革命的イデオロギーを接種する要素としての「アトラクションのモンタージュ」に依拠し、観客の知覚に「直接的」刺激を与える 1906 年以前の映画における露出症・見世物的な視覚要素を意味している。ガニングは、1907 年から 1913 年までの「フィーチャーフィルム (長編劇映画)」において、「アトラクション」のシステムが映画のナラティブに内在化され、物語世界への没入を用意するスペクタクルの要素として「tamed attractions (飼い馴らされたアトラクション) = エフェクト」に収斂されたことを指摘する。

第一章では、これを受けて、「narrative discourse (物語言説)」に奉仕する、イヴェント性を孕んだ「アトラクション」としての「エフェクト」が、観客の「アテンション」を管理し、「アフェクト＝情動」を喚起することを論じた。物語映画の形成期において、観客はナラティブに挿入された「エフェクト」によって、「アテンション」が方向付けられ、能動的に物語世界へ没入し、自らの身体を「矯正」＝「ディシプリン」化するシステムへと取り込まれた。本章では、初期映画研究で論じられる「アトラクション」と「エフェクト」を対置することにより、初期映画から物語映画にかけての映画メディアウムの制度・組織化を「アフェクト＝情動」論の観点から描出する試みを示した。

第二章では、物語言説の線的進行を「異化」する「エフェクト」として「フォトグラム」、あるいは「タブロー」単位のスチールイメージに着目した。従来の物語映画理論は、映画の叙述性と、倫理的価値判断を行う「映画的話者＝ナラティブ」に比重を置く。本理論における「映画的話者＝ナラティブ」は、文化的、社会的ディスコースに多重化される「擬人的虚構」としての「監督」、「作家」になぞらえられ、ナラティブを統御する「観客」とも重複する。

本章では、このような「擬人的虚構」に統括される物語言説の次元のみならず、「エフェクト」として挿入されたスチールイメージが、観客の身体に喚起する微細な「アフェクト＝情動」の変様、連続性、刺激感応のプロセスに注目することを目指した。テキスト・記号論的分析が対象と

する「narrator system（話者システム）」の水準で解釈される物語技法のみならず、「アトラクション＝イヴェント」としての「エフェクト」の分析を精緻化するため、「フォトグラム」と「タブロー」の概念を参照した。

そして、このようなスチールイメージを分類する指標として、本章では、バルトの「ストゥディウム」および「プンクトウム」を導入した。絵画的画面に場面やキャラクターの感情の要約を与える「tableau vivant（生きたタブロー）」を「ストゥディウム」、瞬間性に賭けられ、伝統や慣習にコード化されない「フォトグラム」を「プンクトウム」と想定することで、本章では、制度・組織化された物語映画のメディウム固有性を、動画と静止画、映画と写真、演劇、絵画との相克から観測している。初期物語映画においては、初期映画の「アトラクション」が、「エフェクト」化し、微細なスチールイメージの指標性が、映画の物語言説を駆動する導線として「アフェクト＝情動」を喚起する機能を担っているのである。

第三章では、過剰な「アトラクション」によって観客の「アテンション」を引き付け、その身体を「reform（矯正）」するべく期待された「性病映画」ジャンルと、グリフィスの『国民の創生』以前の短編映画について論じた。常設映画館（ニッケルオデオン）は、映画の視聴システムを制度的に統一し、観客の身体管理をインフラストラクチャの面から支援するものであった。物語映画の形成期に、身体欠損を露わに示すクローズアップ画像等の過剰な「アトラクション」を孕んだ「性病映画」がサブジャンル化し、グリフィスの短編作品のような、家庭的秩序へと観客を「矯正」する作用を期待されたメロドラマ映画が、彼・彼女らの「アテンション」と「アフェクト＝情動」を適正に調律するジャンルとして映画市場に流通していく。本章では、常設映画館という教化媒体に支持された「矯正映画」を取り上げることで、観客の「アテンション」と「アフェクト＝情動」の「矯正」＝「ディシプリン」化について多層的に検討することを目標とした。

第四章では、『国民の創生』における「エフェクト」と、観客の「アテンション」および「アフェクト＝情動」の作動について考察した。本作は『The Clansman, an Historical Romance of the Ku Klux Klan（クー・クラックス・クラン革命とロマンス）』を原作とし、中産階級の観客の視聴を想定した、芸術として鑑賞しうる長編の物語映画の端緒として認知されている。本章では、ナラティブを統御する「映画的話者」と共に、「飼い馴らされたアトラクション＝エフェクト」として、頻出するスチールイメージの設計に注目した。とりわけ、本作のナラティブに挿入された、キャラクターの感情や場面の要約を行う「タブロー」的な画面、時空間の指標としての「フォトグラム」としての画面は、観客の「アテンション」と「アフェクト＝情動」の定点となる視覚刺激を提供している。

第五章では、『国民の創生』の音楽を検討した。事物との時間的な連続性を保障する映画「音」に対し、映画「音楽」はリズムおよびテンポを統御し、反復的に用いられることで、映画のナラティブに挿話的なまとまりを与えている。映画館の暗闇に不動の体制を強いられた観客は、映画音楽に誘導されることで、物語映画のナラティブへの没入を補助されていたのである。

映画音楽に関して、グリフィスは意識的であったことが知られており、ジョゼフ・カール・

ブレイルと共同で『国民の創生』の伴奏音楽の交響曲集を製作している。本作の音楽は、「借り物のスコア」やブレイル作曲の「キャラクターモチーフ」、「シンフォニー音楽」等に分類され、シークエンスやスチールイメージに応じてカットされ、繋ぎあわされている。これらの音楽が担ったのは、切り離されたエピソードや、キャラクター相互の関連性へと観客の「アテンション」を誘導することで、教化・啓蒙的な映画のナラティブへと観客を誘導する素地の提供である。

＊

以上のような分析の手続きを経て、本論文では、制度的な物語映画の到達点として『国民の創生』を題材とし、初期映画の「アトラクション」を「エフェクト」化する振る舞いによって、観客の「アテンション」を引き付け、一方で観客の散逸し、流動した「アテンション」と「アフェクト＝情動」を、「映画的話者＝ナラティブ」によって「矯正」＝「ディシプリン」化する回路が歴史的に成立したことを説明した。

本研究は、20世紀初頭にハリウッドの物語映画が歴史的に分節化した、映像による観客の身体と情動の管理の研究である。